藤香会だより

第40号
令和８年１月１日発行
発行者
一般社団法人 藤香会
事務局
092-724-0007
発行責任者
毛屋　嘉明

長政公の法要が執り行われました

４０３回御忌法要が命日の8月4日、崇福寺で行われました。連日35度を超える猛暑が続いておりましたが、この日は久しぶりに朝のうちに雨が降りました。方丈の暑さは相変わらずですが、幸いなことに日差しは無く遠雷が聞こえる中で、長高様と山崎会長以下44名が参列して法要が行われました。参列者の焼香の後、長高様より暑い中での参拝と先週の藤香会有志による墓所清掃へのお礼の言葉がありました。この後、裏手の長政公墓前に移り、薄日が差す中、僧侶の読経で全員で焼香をいたしました。

その後、博多芙蓉に場所を写し長高様歓迎懇親会が開かれました。

商工会議所会頭谷川様からは天守閣の復元的整備に絡むエピソードの紹介がありました。学会等の研究の結果、天守閣はあったという大方の結論になっていること等の話でした。福岡市民の中にはまだ天守閣再建に無関心な方達も多く、後世のためにも天守閣再建の気運を高めて行きましょうとの挨拶でした。

また懇親会出席者から自己紹介もあり、和やかな談笑の後、全員で黒田節斉唱と万歳三唱で散会いたしました。

文化講演会が開催されました

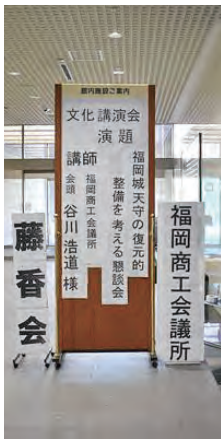
福岡市博物館で令和7年度の文化講演会が9月22日に開催され、約２００名が拝聴いたしました。

講演される福岡商工会議所会頭・谷川浩道さんの挨拶

講師は、福岡城に天守があったかなかったかという議論には既に決着が付いていると、今から10年前の平成27年に丸山雍成九大名誉教授が発表された論文に、一切の反論がないことで、天守閣はあって、その後破却されたのが今や通説となったと述べられた。

途中、九州産業大学の佐藤正彦名誉教授のビデオメッセージがあり、建築学の専門家の立場から五層六階地下一階の建物であること、礎石の間に梁を入れて柱を受ければ石垣を損ることがないことなどを述べられました。礎石の間に梁を入れた例として熊本城があり、その写真が会場に展示されていました。

また天守閣の復元は市民に誇りを持ってもらい、次世代の人たちとりわけ子供たちに郷土の歴史に思いを馳せてもらって、福岡・博多をよい町にするために取り組んでいるものとも述べられた。



福岡市博物館で開催

復元に対する大きな垣根としては文化庁の復元に対する基準が明確でなく、設計図がないから許可できないなどと言われるが、設計図のない平城京の建造物が復元できているので、それに準ずるべき、また復元の為の資金についても安易な税金の投入ではなく、ふるさと納税やクラウドファンディングなどの寄付などによる方策もあるとも話をされた。

史跡巡りを行ないました

10月16日、会員33名が参加して史跡巡りが実施されました。熊本県田原坂に行き、明治時代の西南の役で斃れた官軍、西郷軍の霊を弔いました。福岡県出身者も両軍に別れて戦った戦争でした。

柳生新陰流宗家・長岡鎮廣さんの四方払いに続いて、圓應寺の三木和信住職の読経の後、それぞれ参詣しました。

顕彰碑前での圓應寺・三木住職の読経

顕彰碑前で集合写真

藩校サミットが開催されました

11月1日、朝倉市ピーポート甘木で秋月藩がホストとなって、第22回全国藩校サミット朝倉大会が開催されました。

藤香会からの17名を含む福岡藩の出席者は28名でした

秋月藩・15代当主黒田長幹さんの挨拶

藩校報告会の後、藩校サミットは秋月中学校生徒による藩校「稽古館の教え」の力強い唱和から始まりました。

挨拶は主催者の徳川斉正（水戸藩15代当主）さんが、歓迎の挨拶を秋月藩15代当主黒田長幹さんがそれぞれされました。続いて記念講演では歴史作家の河合敦さんが「人づくりは国づくり～治政安民のための藩政改革」と題して1時間ばかりの講演がありました。

翌日はエクスカーションがあり、秋月歴史博物館、秋月城跡見学後に秋月中学校で光月新太鼓や林流抱え大筒の披露がありました。

来年は奈良県郡山で開催されることに決まりました。

秋月中学校生徒さんの藩校・稽古館の教え唱和

博多の商人三傑

会員　天本　孝久

織豊期から江戸初期にかけて活躍した博多の商人三人について考察する。当時の権力者であった織田信長、豊臣秀吉を資金面で援助し、見返りに商売で優遇され販路の拡大を図った。

島井宗室

宗室は名を茂勝といい、通称徳太夫と称す。後に剃髪・出家して虚白軒端翁宗室と号することになる。代々博多の豪商であり、その家系は遠く大臣・藤原何某に遡る。これらの家系は、他の家系図にもいえることであるが、先祖の地位や高貴さをことさら強調したものといえる。

それによると51代修理亮茂敏という人が何らかの理由があって京都を去り、博多に移り住むことになった。この時は藤（とう）氏を称したようだ。永正年間（1500年代初頭）、藤氏より島井氏を名乗ることになった。宗室は商売の才に長けていたようで、国内はもとより朝鮮・中国・ルソン・シャム等に通商貿易を広げて巨万の富を蓄えた。また資望も高く、その気概も商人にして武士の気質を持っていたとされる。

島井宗室の墓（崇福寺）

この頃九州に覇を争っていた大友宗麟や秋月種実、筑紫広門、松浦鎮信らと交流を深める。当時は茶が武士の嗜みとなり、文化となってきたことを見抜き、自ら茶道を大徳寺の古渓和尚、江月和尚に学んで、外国貿易を通じて名物といわれる茶器を収集する。

これらの茶器を諸将に献じてその結びつきをますます強固なものにした。

また得度・出家することで一商人の身分を超越して時の権力者・信長や秀吉、その他の諸将と交際を広めることができたのであろう。

本能寺の変

天正10年6月1日、もう一人の博多の豪商である神屋宗湛とともに信長に会うために京都に入り、その夜信長の宿所である本能寺に伺候して信長に謁見する。

宗室・宗湛が自ら信長に会いに行ったのか、信長が軍資金を得るために2人を招いたのか不明ではあるが、とにかく2人は信長に謁見した。信長は2人を茶室に案内し茶を点て閑話する時に、明智光秀の軍勢に囲まれる。

信長が敵軍に立向かうため席を外すと、宗室は茶室に掛けてあった空海の真筆である「千字文」の巻物1巻（下巻部分）を、宗湛は牧溪の「遠浦帰帆」を懐にして僧服を着して僧侶の群と一緒に逃れた。

火事場泥棒というか国宝級の文化財を救ったと称すべきか。ただこの「千字文」を宗室は私物とせず、博多東長寺（空海が弘通した真言宗）に寄贈して今に伝わる。令和7年4月の東長寺秘宝展で公開された。

楢柴の肩衝

宗室は天下の名器といわれる茶器を多く集めている。そのひとつが「楢柴の肩衝」である。肩衝とは抹茶を入れる小さな茶入（壷）の種類のことで、銘が楢柴とつけられている。元は松浦鎮信の家に伝わったものが宗室の手に入ったものというが、詳しい経緯は不明である。

大友宗麟がこれを聞いて、家臣に書を持たせて所望したが、宗室は強く拒絶して譲らなかったようだ。秋月種真からも同様の書がもたらされたが、宗室は大友同様に拒絶した。秋月からは「譲らなければ軍勢をもって博多を囲み、兵力に訴えてでもことをなさん」と迫られたが、「軍勢に対しては宗室が御相手仕らん」といって謝絶した由。

その後、秋月種真・筑紫広門らが、秀吉や石田三成、茶の師匠である利休と親密な宗室を訪ね、秀吉に意を通じて欲しい旨依頼する。この時の茶会の席で宗室の隙ををみて、楢柴を盗み取られる。宗室は深く追求せず、茶室を焼いて不問に付した。

秀吉は島津を攻め、島津方であった秋月種真は楢柴を献じて和を乞うことになる。後日、大坂城に秀吉を謁見し、博多再興の礼を謝して、茶室に案内され、楢柴を見せられる。秀吉が「これを知っておるか」と問われ、宗室は「徳川殿より献じられた名器『初花』と思う」と答え、自分が盗まれたものとは言わなかったので、秀吉は宗室の胆量の広さに感じ入ったとのことである。

茶器は諸将の間で珍重された。手柄のあった武将に名器の茶器を与えたのは信長が最初である。福原・上月の両城を落とした秀吉には「乙御前」という茶釜が与えられ、他の武将と並んだ。それまで茶器を与えられた武将は、明智光秀（八重桜の葉茶壷）、柴田勝家（姥口の釜）、丹羽秀長（白雲の葉茶壷）だけであった。

後に滝川一益が手柄を挙げた時に上州（今の群馬県）一国が与えられたが、滝川は「お茶器をいただきたかった」と残念がったことは有名である。

秀吉の死後、形見分けで家康の手に渡り、明暦の大火で焼失・破損し、修復されたが、その後所在不明となったと伝えられる。

長政の筑前入国

宗室は、秀吉の朝鮮出兵（文禄・慶長の役）には、貿易相手の地を蹂躙することから消極的であった。

関ヶ原以降は家康と交誼を厚くし、長政の筑前入国後は福岡城建築の為の資材を提供して、箱崎村に300石の知行を受けたが、この内50石だけをいただき他は返上している。その50石も崇福寺塔頭・瑞雲庵に寄進している。元和元年8月24日博多浜口町の自宅に没し、崇福寺瑞雲庵に葬られる。墓は今も「藤水門」に向かって左側にポツンと建っている。

遺言によって、聖福寺の塔頭弓一庵を再建して、元和7年8月の七回忌にこの弓一庵は宗室の法号虚白院に改めて法要を営んだ。虚白院は仙厓和尚を住持とした時期もあり、その後代々島井家の墓所は虚白院にある。

参考文献

・「商人亀鑑　博多三傑傳」　江島茂逸・大熊浅次郎編録　明治25年6月刊　博文館
・「茶道全集」巻5「嶋井宗室」　桑田忠親著　昭和11年8月刊
・「石城志」巻9　昭和52年7月復刊　創元社
・「官兵衛の夢」　津田元顧校定　元貫編録　平成25年11月刊
・「仙厓百話」　荒井恵美子　北辰堂出版　石村善右　文献出版　昭和55年刊

黒田武士掃苔録（4・5）

三浦 明彦
（郷土史家 藤香会会員）

4番　黒田一成（くろだかずしげ）
1571～1656

○墓所について
崇福寺：臨済宗の寺院（福岡市博多区千代）に墓がある。
清岩寺：曹洞宗の寺院（福岡県朝倉市三奈木）に墓がある。

○名のりについて
幼名は玉松、通称は三左衛門、官称は美作、諱は一成、剃髪号は睡鷗。

○人物略伝
加藤重徳の次男、9歳の時に黒田孝高に迎えられて養子となった。孝高の嫡子長政と兄弟として育てられた。一成の実父加藤重徳は攝津有岡城主・荒木村重の家臣であった。かつて黒田孝高が村重に捕らえられ、地下の土牢に軟禁され折り、孝高になにかと世話をしてくれたのが、牢番だった重徳であった。後に救出された孝高は重徳の恩に報いるために一成を引き取って養子に迎えたという。孝高の養子となった一成は孝高・長政父子に従って九州出兵に参戦し、父子が豊前に入封すると、4480石の知行を与えられる。朝鮮出兵でも長政に従って出陣、黒田勢の先手大将を務めた。1600年の関ケ原の合戦でも長政に従って出陣、主力決戦でも奮戦した。

黒田父子が筑前に入封すると、下座郡にて12，000石を与えられて、三奈木に居館を設けた。三奈木に居館を設けたものの、一成は福岡城下の屋敷に常駐し、長政を補佐した。

大阪冬の陣・大阪夏の陣では、両陣共に長政の嫡子・忠之の後見役として出陣している。

さらに天草・島原の乱に際しては、これまた忠之を補佐して出陣、幕府軍の全体軍議にも参加した。この軍議への参加は、幕府老中首座・松平信綱の要請によるものであった。

一成は黒田家家中においては、別格的存在で大老という地位に置かれ、一成の家系は「三奈木黒田家」と呼ばれた。所領の方も加増があり、16，205石まで達している。

史上名高い「黒田騒動」でも活躍し、主君・黒田忠之を幕府に直訴した筆頭家老の栗山大善（利章）と対決、忠之の弁護に努め、忠之を勝訴に導いている。

ということで、一成は孝高（如水）・長政・忠之の3代の主君に仕え、73歳で勇退、隠居の身となった。隠居してからは剃髪して「睡鷗」と号し、明暦2年（1656年）11月13日に86歳を以って没する。

黒田一成の墓（崇福寺）

5番　栗山利安（くりやまとしやす）
1551～1631

○墓所について
円清寺（福岡県朝倉市志波）：利安が開基した曹洞宗の寺院に墓がある。

○名のりについて
幼名は善助、通称は四郎右衛門、官称は備後、実名は利安、剃髪号は卜庵。

○人物略伝
播磨栗山村の住人、栗山善右衛門を父とする。15歳で黒田孝高に小姓として仕える。

初陣で手柄を立て83石の知行を与えられる。孝高の側近として頭角を表わし、九州出兵（秀吉の嶋津征伐）では孝高に従い、戦場において一番乗りの功名を上げる。孝高が豊前へ入封すると6，000石を与えられ、支城（出城）の一つ平田城の城代に抜擢される。平田城は別名白米城（まつたけじょう）という地元豪族の城であったが、この城を孝高（如水）の命令によって、石垣造りの城に修復している。朝鮮出兵では黒田長政に従って出陣、1600年の関ケ原の合戦時、黒田家大阪屋敷の留守居役を務めていたが、この折、豊臣方人質に取られそうになった如水の正室「お光」と長政の正室「栄姫」を屋敷から脱出させ、国元の中津城へ無事に送り届けた。ちなみに、かつて攝津有岡城の地下牢に孝高が軟禁された時も、孝高を救出したのも利安であった。ところで中津に主君の正室と生母を連れ戻った後の利安は、如水に従って豊後石垣原の合戦に参戦し、その後も豊後安岐城、同富来城、同日隈城、同角牟礼城攻略戦に参戦し、接収した日隈城と角牟礼城の城番を務めている。やがて如水・長政父子が筑前へ入封すると上座郡にて15，000石を与えられ、左右良（までら）城の城代となる。また徳川家康の仲介で、毛利元清の未亡人（千代姫）を後妻として娶る。彼女は長門雄山城主・毛利秀元の継母に当る女性だが、秀元の姉という形式で嫁いできた。さて左右良城代となった利安であるが、主君長政の領国治世を補佐し、如水の没後は長政の後見役を担う。1623年、主君長政の死去に伴い勇退隠居、剃髪して卜庵と号し隠居料700石を与えられる。

寛永8年（1631年）8月14日に没する。享年81歳。

なお、利安の隠居により、栗山家の当主となったのが、利安の嫡子・利章（大膳）である。官称の大膳で広く知られ、筆頭家老に任命され、二代藩主・黒田忠之の補佐役を委せられるが、やがて主君忠之と対立、忠之を幕府に直訴して「黒田騒動」の立役者となる

黒田一成の墓（青岩寺）

栗山利安の墓（円清寺）

会員クリック㊲

妙楽寺先住職
渡辺　桂堂

「妙楽寺墓地に眠る武家商人の人たち」

妙楽寺墓地に現存する黒田家家臣の墓石群には、三代藩主光之公の三男黒田左兵衛宗玉公の墓を中心に、黒田藩政時代に活躍された人達の墓が存在します。それらの墓を簡単に紹介いたしましょう。

長政公の恩ある竹中半兵衛の孫・竹中主膳重次の墓。重次に殉死した大神忠右衛門の墓。

荒木村重の孫・村光の墓、宮崎織部安尚の墓、末次久四郎孝善（興善）の墓。吉田可休の墓。花房治左衛門の墓、菅和泉家の墓、二十四騎の一人竹森石見次貞の墓、毛利元辰の墓、吉田壱岐重成と歴代の墓、伊丹九郎左衛門氏親の墓、豪商神屋宗湛の墓、桐山丹波家代々の墓、光之公の代に活躍した鎌田八左衛門と九郎兵衛の墓。郡次兵衛・金右衛門尉の墓、城内家老の大音家の墓、同じく城内家老の毛利家の墓、勤皇の志士伊丹慎一郎・森勤作の墓、森安平の墓、商家西村善右衛門の墓。

開山堂墓地には、開山月堂和尚の墓、歴代住持の塔、黒田監物一族の墓、御典医鷹取養巴と歴代の墓、櫻田屋長野家歴代の墓、佐幕派の家老久野将監の墓、同じく大身吉田久太夫家・八代利征の墓、大野仁平の墓。

博多の豪商伊藤小左衛門一族の墓。初代小左衛門吉次の夫人は（豪商末次宗得の娘）開山堂横に望雲庵という庵を建て、尼となって非業の死を遂げた我が息子（二代目小左衛門吉直）と孫や手代の霊を弔った所である。

また今の開山堂がある場所は、もとは黒田監物の夫人（衣笠因幡の娘）が即宗庵という庵を建て、島原の乱で負傷し亡くなった主人監物と息子の霊を弔った場所である。

以上墓所の紹介をしましたが、縁ある方、研究・調査をなさっている方はどうぞお参りなさってください。

ちょっとうんちく

黒田騒動についてはご存じの方も多いとは思いますが、藩主忠之公が暗愚であったためとか、いやそうではなく時代が戦のない太平の世に変わったのに従来の武将たちの考えが転換していなかったためだというような主張がなされています。

この黒田騒動は当時から全国的に有名だったようで、講釈師や講談師たちがおひれを付けて広げたようです。

寛永箱崎文庫（表紙）

私（天本）が所蔵している「寛永箱崎文庫」は黒田騒動を題材としたゴシップ記事満載の週刊誌といったところです。刊行はなんと中山道・新町宿（現群馬県伊勢崎市）にある川平という出版社。あまり売れなかったのか、それとも木版刷りにする資金が調達できなかったのか、手書きである。

寛永箱崎文庫（目次）

忠之公は右衛門佐とも書かれ、「ゑもんさ」とルビが振ってある。

忠之公の佞信は倉橋八十郎（後の話では倉橋重太夫と名前が変わる）で実在の倉八十太夫に似せて書かれ、後藤又兵衛に情報を渡したとして斬られた空誉上人は発音がよく似た紅陽法印となっています。

話は倉橋八十郎が取り立てられるところから始まる。鑓稽古衆の中に美少年がいてしかも鑓遣いが華やかであったので、親は百俵五人扶持であったが、八十郎は小性に召出されて二百石を与えられる。その後何かにつけて加増される。

ある時、無法者の鬼河原源蔵なる者が、博多で臑を出していた。そこへ忠之公が通りかかった。八十郎はその臑は売り物かと聞く。源蔵が二百両だと答える。ここに百両あるから、手付を入れておく。残りは後で届ける。その代わり半分をいただいて帰ると言って片足を斬り落とした。これが御意に叶い五百石加増となった。

このような話が延々と続く。この「寛永箱崎文庫」3、4、9、10巻だけ入手しているが、全巻に亘って面白おかしく書かれている。

同じ黒田騒動を取り扱ったものとして、「箱崎釜破古」があり、これは北海道大学と広島大学が所蔵しており、ネット上で公開されている。

寛永箱崎文庫（記述）

★新規入会員紹介

1. 一般会員
入江　勇臣　平川　猛展
木村厚太郎　石津　洋
濱中　聡生　平岡　勝彦
横山　謙治　桑原　康子
佐伯　和子　小島　洋子
千々石きわ　島　良祐

2. 賛助会員　55企業・団体

編集後記

妙楽寺の墓所について渡辺桂堂和尚様に解説を書いていただきました。歴史上有名な黒田家家臣のお墓の多いのに驚かされます。また博多らしく豪商のお墓も多いですね。（天本記）

ホームページアドレス
http://toukoukai-kuroda.com/
藤香会　検索